

明代文学と司馬遷の思想：周宣王時代

Ming Literature and the Thought of Sima Qian: The Era of King Xuan of Zhou

ホノベ・エリック

要約： 明代文学の一大歴史小説、馮夢龍^{ふうぼうりょう}の「東周列国志」は、大歴史書である司馬遷の「史記」を元にした作品である。周宣王時代に焦点を当て、「史記」を軸として他の中国古典「墨子」「説苑」なども織り交ぜられた「東周列国志」の小説の比較分析を行う。また中国古典の内容をより豊かに仕上げ脚色として用いられている特徴についても触れてゆく。

キーワード： 司馬遷、史記、明代文学、馮夢竜

Abstract: We present a comparative analysis between a major piece of Ming literature from the Ming dynasty titled *Chronicles of Eastern Zhou Powers* by Feng Menglong and pre-Han classical texts such as *The Grand Scribe's Records*, *Mozi*, and *Garden of Stories*. These classical texts pertain to the thought of Sima Qian, also known as the first Grand Historian of China. This paper focuses on historical events during the reign of King Xuan of Zhou, and we consider through concrete examples how the thought of Sima Qian was dramatized in this piece of Ming literature.

Keywords: Sima Qian, Grand Scribe's Records, Ming literature, Feng Menglong

はじめに

中国の明代に執筆され清代まで様々な修正や改編を経て「東周列国志」は現代中国で古代四大民間小説の一つとして広く読まれている。本稿では「列国」と称する。「列国」の全ての内容や物語が史実であるとは言い難いが、中国では史学思想の豊富な小説であると評価されている。著者は主に明朝末期の文学者馮夢龍^{ふうぼうりょう}とされる。明代嘉靖・隆慶年間（1522年 - 1572年）に余劭魚^{よしょうぎょ}が「列国志伝」を書き、明末、馮夢龍がこれに様々な部分を修正や補足し、「新列国志」と改称する。また、1573年^{さいげんほう}に蔡元放が更に修正を加え「東周列国志」と改称する。馮夢龍の作品「列国」「智囊」などは社会の不公平や朝廷の腐敗を描いている。彼は晩年に反清朝の作品を編集した。そして、明朝の滅亡の時に殉死した可能性が高い（Chang, 2010）。日本では江戸時代に馮夢龍の作品「笑府^{しょうふ}」という笑話集が多く読まれた。有名な落語「まんじゅうこわい」の原本は「笑府」の一話である。また「東周列国志」の和訳は近年に完成された（中橋正吉, 2007年）。

周王朝の衰退の時代から秦の始皇帝の時代までのおよそ五百年の歴史が網羅されている。「列国」の始まりは周王朝の滅亡を語っている。紀元前七七一^{しちちち}年に周は異民族に侵入され

て周王は西にある鎬京（漢代の長安、現在の西安）から東にある維らく邑（現在の洛陽）に移動せざるを得なかった。移動前は西周時代とし、その後を東周時代という。「列国」は東周時代あるいは春秋戦国時代にあった王朝の歴史や人物を語る小説である。本稿はその小説の五百五十年の中の序盤・周宣王（在位 前 828 年 - 前 782 年）の時代に焦点を当てる。

1. 異民族との戦い

第十一代王である周宣王は遷都の数年前から異民族の戎を征服しようと戦をしたが何度も大敗した。そして在位三十九年の敗北後、再び太原に於いての民を徴兵しようとしたが「史記・周本紀」では臣下の仲山甫が「民を徴兵してはいけない。」と諫めた。しかし、宣王は聴かず、ついに民を兵として集めた。これ以後周王朝の衰退が始まった。「史記」の話ではここで途切れている。しかし「列国」においては、それ以降の話も続く。次章に述べる。

2. 周王朝の滅亡を予言した童謡

周の滅亡について「史記」では幾つかの奇妙な伝説が記されている。一つは周の滅亡を予言する童謡「山桑の弓と箕の服。周の国が実に亡ぶ。」である。その童謡が本当に当時存在したのかは明らかではない。「史記」では著者は不明であるが、周の史官の伯陽が宣王が崩御した数年後にその記録を読んだことだけは記されている。しかし「列国」では宣王がその童謡を聞いたのは、ちょうど戎を討つために徴兵していた頃であり、宣王が童謡の意味を臣下に下問すると仲山甫が忠告する。

「弓は国家の武器である。王は太原で民を徴兵し、犬戎の仇を報いたいと思っておられる。しかしながら、もし直ちに兵を解かなければ必ずや亡国の患いがあります。」
 「史記」では仲山甫の忠告が事実とされるが、弓矢の童謡についてはふれていない。一方「列国」では仲山甫が、徴兵を取り止めるように王に強く説得するため童謡を利用して。歴史的事実と伝説を上手く絡み合わせ、興味深く話の筋道をたてていると言える。また、仲山甫については、孔子が編集した「詩経」の「烝民」という詩の中に仲山甫の道徳を唱えているものがある。「列国」の中で仲山甫が様々な賢明な助言を行い周の重要な臣下とされるのは、おそらく筆者が上記の孔子の詩経を重視していたからだと思われる。

3. 周王は予言を信じ、無実の民を処刑しようとする

その亡国の予言の中心には褒姒ほうじという重要な人物の存在がある。歴史ではたった一人の美女によって国が減んでしまうのは少なくない。妲己だつき、楊貴妃ようきひのような傾国の美女であった周王に仕えた褒姒ほうじもその一つの例である。褒姒ほうじは宣王が崩御した後に王宮に入って息子の寵姫となった。「笑わない王妃」で知られている。褒姒ほうじは宣王の在位の頃に誕生し、上記に登場した伯陽はくようが読んだ弓矢の童謡と同じ書物に、その誕生について不思議な物語が書かれていると「史記」にある。褒姒ほうじが宮中で竜の唾つばから生まれたということである。そして赤子の褒姒ほうじが女官に棄てられて、弓矢を売る夫婦に見つけられ連れて行かれた。これで弓矢の童謡との関連が見られる。詳しく述べると、「史記」では宣王が予言を恐れて、その予言を防ぐため、弓矢を売る夫婦を処刑しようとしたが幸い二人とも逃げきることができた。一方「列国」では夫だけが逃げきり、妻は処刑された。因みに、その予言通り運命は結果的には変わらなかった、という興味深い要素もある。それは周王が夫婦を処刑しようとしたから、夫婦が近くの川まで逃げ込んで、川に捨てられた赤子の褒姒ほうじを拾って育てたからである。

4. 名臣が冤罪で処刑される

中国古典の「墨子」の中では宣王が不思議な最期に遭ったと記されている。次章にその詳細を述べる。ところで前章に述べたように「列国」では宣王が弓矢を売る無実の妻を処刑した。それは宣王の非情の自業自得の最期を強調するためであろう。また、宣王は杜伯とほくという臣下に、赤子の褒姒ほうじを探し出し殺するように命じている。しかし杜伯とほくはその任務に失敗したため宣王に処刑されたという悲劇的な事件もある。この杜伯とほくの処刑は「史記」に記載されていないが中国古典の「説苑・立節」にある。

左儒さじゆは杜伯とほくの友人で、ともに周の宣王の臣下であった。宣王が杜伯を処刑しようとしたが、杜伯に罪は無い。左儒は王に逆らいその裁きを争って九回も訴えたが、王は許さなかった。王は「主君に背いて友人に加担するというのか。」左儒は答えた「私はこう聞いております。主君が道に合って友人がそれに逆らえば、直ちに君主に従って友人を罰する。しかし、友人が道に合って主君が逆らえば、直ちに友人の側について君主に逆らうべき。」

そして杜伯とほくが処刑され左儒さじゆが自決した。また「説苑・立節」の和訳・飯倉照平の訳注によると杜伯とほくの冤罪えんざいは褒姒ほうじを探す任務の失敗ではなく宣王の寵姫が訴えた冤罪であった。「列国」では杜伯とほくの処刑が、赤子の褒姒ほうじの存在とつながって周の滅びのもう一つの要素になる。また、左儒さじゆについての詩がある。

賢者なる左儒^{さじゆ}や、君主の逆鱗^{さかきり}に触れる。是なれば友に従い非あれば君に背く。冠を弾いて誼^{よしみ}を重んじ、真^{まこと}の刎頸^{きりかみ}の交り。千古に名高く、式を用いて彝倫^{いりりん}なり。

5. 周王は臣下の幽霊に復讐を報いられる

罪のない杜伯^{とほく}の処刑が前述の古典「墨子」にもある。「墨子・明鬼下」によると処刑された三年後、杜伯が昼間の時に大勢の人々の前に突然現れて宣王の胸に矢を放った。「墨子」では幽霊の有無が論じられているが「列国」では宣王が杜伯と親友である左儒の二人の幽霊に襲われたことで急病になり数日後崩ずる。「列国」の第一章では周の滅びることの様々な凶兆を示すため「史記」「説苑」「墨子」からの幾つかの有名な故事を紹介し巧妙に新たな関連が発想されたといえる。その第一章の終わりに詩がある。

赤矢と朱弓^{かお}、貌^{かお}は神に似て、千軍の中から騁^はせ飛んで輪^{めぐ}る。君王枉^いげて殺し、還^{かへ}って須らく報^いれば、何ぞ況^いや区^ま々の平^ま等人。

以下の表は五つの事件における中国古典と「列国」の比較をまとめる。

事件	中国古典	明代小説「東周列国志」
1. 異民族との戦い	仲山甫が太原の民の徴兵を諫める（史記）	同様
2. 亡国を予言した弓矢の童謡	周王朝の滅亡を予言する弓矢の童謡があるがその時点は不詳。（史記）	予言の時点は太原の事件の直後となる。また、仲山甫が予言を利用し太原の徴兵を諫める
3. 周王が無実の民を処刑しようとする	童謡を防ぐため、周王が弓矢を売る夫婦を処刑しようとするが二人とも逃げ込む（史記）	夫が逃げるが妻が処刑される。
4. 名臣が冤罪で処刑される	杜伯が冤罪で王の寵姫に訴えられて処刑される。（説苑）	杜伯が童謡の予言を阻止できず、その失敗で処刑される。
5. 幽霊からの復讐	杜伯の幽霊が復讐のために弓矢で王を襲う。（墨子）	杜伯と親友である左儒の二人の幽霊が弓矢で王を襲う。

おわりに

中国の史上の歴史家・司馬遷（前 145 年 - 前 87 年）は中国では勿論、日本でもよく知られている。その司馬遷の記した全百三十巻にのぼる「史記」には多くの有名な人物、秦の始皇帝、項羽と劉邦などが登場している。また、「臥薪嘗胆」「呉越同舟」などの有名な故事成語も記載記されている。「史記」に基づいた日本の小説が多く（北方謙三、宮城谷昌光など）、日本を代表する古典・源氏物語の中にも「史記」が引用されている。ところが、終戦後以降の日本では一般の人々の中で実際に「史記」を読んだことがある人は少ないのではないだろうか。現代語訳文であっても本文の構成が辞典のような記述で複雑であり、この全てを把握するのは容易なことではないと否めない。しかし、古くから日本の文化や文学は「史記」の影響を大きく受けたのも事実であり、現代の日本人が「史記」に興味を持つ事が望ましいことであろう。一方、歴史一大小説の「東周列国志」では歴史の流れの中で人物を中心として書かれており読み手を惹きつける要素が多くある。小稿を通じて二千年前以上の中国古典に少しでも興味を持って頂けたら幸甚である。

参考文献

飯倉照平 訳(1974). 『説苑』平凡社.

石川 忠久 訳 (1997). 『詩経』明治書院.

小竹文夫・小竹武夫 訳 (1995). 『史記』司馬遷. 筑摩書房.

中橋正吉 訳 (2009). 『東周列国志』馮夢龍. 近畿大学中央図書館.

山田 琢 訳(1975). 『墨子』明治書院.

Chang, K. S. & Owen, S. (2010). *Cambridge History of Chinese Literature*, Cambridge University Press.

Received on Nov. 2, 2012.